

第一章 神原文庫

詳細に残る記録をたどって、
貴重な資料の海へ漕ぎ出そう。



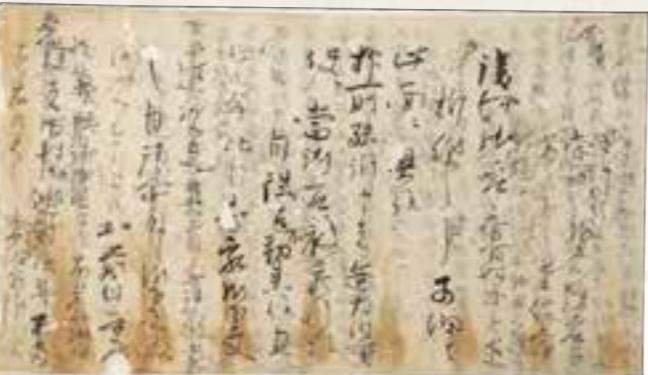
香川大学初代学長
神原 甚造

「私を今日に導いた最初の道標でもある」と、晩年に回想しています。コレクションの記録は1922年から1950年まで存在し、特に昭和初期までの熱心な収集ぶりがうかがえます。時には、一度に300点近い史資料を購入することもあったようです。「正確にいつから収集を始めたかはわかりませんが、1918年にご夫人を亡くされていて、それもコレクションに打ち込むきっかけの一つだったかもしれません」と守田教授。

明治～昭和初期は、日本の文化財が市場中に大量流出した時期でもありました。富裕層や知識人層を中心的にコレクションが大ブームとなり、神原文庫も知識人による収集例の一つです。

文化財的な古書を扱う古書肆も数多く、神原先生の記録帖には「玉林要之輔」「嚴松堂」「一誠堂」はじめ、関西圏や東京の有名な古書肆の名が連なります。店舗や露店まで買に行くだけでなく、こうした業者が「珍しい品が入った」と声を掛けたり、自宅まで直接販売に来たり、晩年には即売会に足を運んだりと、コレクションの入手経路はさまざま。記録帖に残る入手元は240を超えます。

蔵書印から伊藤博文が旧蔵していることがわかる書籍などもあり、收藏品が神原先生のもとに渡るまでに誰



『東大寺年預五師某書状』
年月日未詳(鎌倉時代前期)



『東京日々新聞(錦絵)』(明治5[1872]~8[1875]年)

「東京日々新聞」は現「毎日新聞」(東京本社版)の前身。
新聞に出たニュースを題材とする新聞錦絵で発売と同時に評判となつた。

収蔵品は可能性の塊

守田教授は「東大寺文書」の研究を通じて神原文庫に出会いました。東大寺文書は東大寺に伝わる奈良～江戸期の古文書群で、中世以前の文書の大部分は一括して国宝に指定されています。明治時代に散逸したものが多く、流出文書群は1

デジタル化も 視野に入れ再調査中

36件以上に上ります。「2016年に本学に着任して、「ひょっとしてあるんじゃないか」と神原文庫を調べてみたら、流出した文書のうち3件が見つかったんです。非常にうれしい発見でした」。見つかった東大寺文書はいずれも鎌倉時代のもので、類似する史料はほとんど残されていない貴重なものだとか。

コレクションを詳しく調べていく中で、甲斐国を追放された後の武田信虎(武田信玄の父)との関係がうかがえる室町幕府13代将軍足利義輝の書簡など、重要な史料が出てきたことも。神原文庫は、新発見につながる可能性をまだまだ秘めていそです。

一方で、記録帖には載っているのに存在しないものや資料の一部が落しているものも見られ、収蔵品により詳細な調査と目録のアップデートは今後の課題の一つです。「図書館では昨年から少しづつ整理を始めています」と、神原文庫の利用に携わる河原佳子さん。整理を進めている情報図書課では、目録をきちんと整え

直すとともに、デジタルアーカイブの充実も視野に入っています。資料は保存と発信の両輪が大切です。全国・世界各地から気軽にアクセスできる環境を整え、さらにさまざまな研究に貢献していくためにも、本格的なデジタルアーカイブ化に期待したい」と守田教授と河原さん。

高校時代から文芸誌『明星』に短歌を発表するなど歌人としての顔も持ち、神原文庫には神原先生自身の日記や歌集、講演録も含まれます。小学校に上がる前に祖母に「読本」を教わって「文字」に興味を持ったことが

神原先生は1884年に多度津町で生まれ、丸龜中学校、第三高等学校を経て京都帝国大学法学部へ進学。大学卒業後は司法官として活躍し、1925年から1945年まで大審院判事を務めます。1950年に65歳で香川大学の初代学長となる郷土に戻り、香川の教育・文化発展に尽力しました。

高校時代から文芸誌『明星』に短歌を発表するなど歌人としての